

富田林市埋蔵文化財調査報告4

中野遺跡発掘調査概要Ⅱ

1980.12~1981.3

1981

富田林市教育委員会

はじめに

河南の中心を流れる石川は、古くから多くの文化を育んできた。ここに報告する中野遺跡はその証として残されている石川流域の遺跡のひとつである。

中野遺跡は、明治25年の『人類学雑誌』に「河内における石器の新発見」としてすでに紹介されているが、その後1970年まで何ら調査されることがなかった。しかし近年の宅地開発の激化にともない部分的ながら調査が進みその概略が浮かび上がってきた。それによるとこの遺跡は、弥生時代から平安・室町時代に至る集落遺跡ではないかと考えられるが詳細は明らかでなく、その解明は今後の課題であり今回の調査結果がその課題解決のための一助となれば幸いである。

最後に本調査及び報告書の作製にご指導ご協力賜った方々に厚くお礼申しあげる。

昭和56年3月

富田林市教育委員会

教育長 岩井好一

例　　言

1. 本書は富田林市教育委員会が昭和55年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が実施した中野遺跡の緊急発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、富田林市教育委員会社会教育課中辻亘を担当者とし、昭和55年12月1日に着手し、昭和56年3月31日に終了した。
3. 本書の作成にあたっては、参加者全員があたり、本書の執筆は忍薰氏の御協力を得て中辻亘が行った。遺物の項は忍氏が、その他は中辻が担当した。
4. 本書の編集は中辻が、製図は忍氏が行った。
5. 調査の実施にあたっては、神戸商船大学教授（富田林市文化財調査会委員）北野耕平氏ならびに大阪府教育委員会文化財保護課技師今村道雄・尾上実氏より格別の御助言をいただいた。また、天理大学附属天理参考館学芸員竹谷俊夫氏の御協力を受け、市教育委員会社会教育課職員ならびに地主の方々の御援助を得た。ここに記して感謝の意を表する次第である。

調　　査　参　加　者

成川雅治 松永勤子 宮前 好 白江和弘 大川英行
本並良一 高橋修美 端山直樹 田中克明 森田增穂
大西敏行 橋本 智 大石 聰 岡本武司 武矢幸信
(以上河南高校O B) 山下 治 (富田林高校O B)
山口勝弘 (阪南大学) その他、河南高校考古学クラブ
の諸君ならびに本並宏介 大工辰治君の協力を得た。

本 文 目 次

	頁
I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	3
III 層序及び遺構	4
IV 出土遺物	10
1 溝3出土土器	10
2 土器	11
3 ヘラ記号について	17
4 瓦	18
5 石器	19
6 小結	20
V まとめ	21

挿 図 目 次

挿図1 中野遺跡周辺地形図	1
挿図2 中野遺跡地形図	2
挿図3 北壁断面図	4
挿図4 遺構平面図	5
挿図5 遺構平面図(地山面)	6
挿図6 溝3断面図	7
挿図7 焼土塊平面図・断面図	9
挿図8 溝3出土土器実測図	11
挿図9 須恵器実測図	12
挿図10 須恵器実測図	13
挿図11 土師器実測図	15
挿図12 土師器実測図	17
挿図13 ヘラ記号拓影	18
挿図14 瓦実測図	18
挿図15 石器実測図	19

表 目 次

頁

表1 出土遺物の割合.....10

図 版 目 次

図版1 中野遺跡付近の航空写真 北東より

図版2(上) 発掘調査区の遠景 南東より

(下) 溝1・2・3 北より

図版3(上) 溝3 南西より

(下) 溝1・2・3 南より

図版4(上) 溝3 遺物出土状況 北より

(下) 溝3 遺物出土状況 西より

図版5(上) 焼土塊出土状況 北西より

(下) 焼土塊出土状況(全景) 北西より

図版6(上) 焼土塊付近全景 南東より

(下) 焼土塊付近全景 北西より

図版7(上) 調査区南壁断面 北より

(下) 調査区南東部全景 北より

図版8(上) 土壙1 遺物出土状況 北西より

(下) 土壙1 遺物出土状況 西より

図版9(上) 土壙1 遺物出土状況 西より

(下) 土壙4 遺物出土状況 南西より

図版10(上) 土壙3 遺物出土状況(上方) 北西より

(下) 土壙3 遺物出土状況(下方) 北より

図版11 須恵器 杯、杯蓋

図版12 須恵器 杯、杯蓋、高杯、平瓶、短頸甌

図版13 土師器 鉢、杯、高杯

図版14 石器 (石鎚・石匙)、砥石・瓦

I 調査に至る経過

富田林市は大阪府の東南部に位置し、南河内の地方中心的な性格をもつ中核市街地と、農山村的性格をもった周辺地域との共存によってバランスをとりながら長い間比較的の変動の少ない状態におかれてきた。しかし、近年羽曳野丘陵における開発が活発となり、これに伴う人口増加の現象が続き、大阪市や堺市などの大都市のベッドタウンとして急激な変化をしてきている。

このような影響は、市内の中心を南から北に流下する石川の西岸地域においても顕著である。



摺図1 中野遺跡周辺地形図

中野遺跡もこうした地域にあって、年々宅地開発の波がおし寄せてきている。今回、富田林市若松町5丁目1454番地先において倉庫建設の申請があがった。この予定地が中野遺跡内にあることから、本市教育委員会が事前に試掘調査を実施した。調査の結果、地表下約40cmより須恵器を多量に含む包含層を検出した。この調査結果に基づいて、昭和55年12月1日より本格的な発掘調査を開始し、昭和56年3月31日をもって調査を終了した。

なお、本調査は国道170号線と近鉄長野線の間にあたり、中野遺跡内における発掘調査地としては最も西に位置している。



挿図2 中野遺跡地形図

II 位置と環境

中野遺跡は富田林市中野町1丁目、同2丁目、若松町4丁目、同5丁目、中野町西1丁目、若松町西3丁目、同2丁目に位置する。遺跡は羽曳野丘陵の東方、石川西岸の河岸段丘上にあって、中央をほぼ南北に走る国道170号線によって東西に2分された形になっている。遺跡のはるか東方には金剛・生駒山地が峰を連ね、正面には二上山がそびえる景観を有している。中野遺跡の東方を南から北に流れる石川は、金剛・和泉山地に源を発し、大和川と合流した後、大阪湾に注いでいる。市内の多くの遺跡は石川に面した河岸段丘上に位置している。

地形的にみると、南から北にゆるやかに傾斜しており、北方において大阪平野と接触をもつものの、他は山地と丘陵に隔てられ、交通の連絡は決して容易ではなかったことがうかがえる。

こうした地理的条件にあって、石川流域には縄文時代より歴史時代にいたる遺跡が分布している。^(注1) 縄文時代前期の錦織遺跡は標高約75m、石川西岸の河岸段丘上にある。石川の河床との比高差は20mほどにすぎない。弥生時代になると標高約48m、石川西岸の河岸段丘上に喜志遺跡^(注2) が出現する。この遺跡は市内の北端に位置する弥生時代中期の集落址で、その範囲は南北約500m、東西約300mにおよぶと推定される。中期以降になると市内南部の高地に遺跡がみられるようになる。石川を西方に見おろす丘陵上には彼方・滝谷遺跡があり、弥生時代後期の高地性集落の特徴が認められる。

古墳時代になると石川両岸の平地を一望する位置に多くの古墳が営まれる。中野遺跡の西方を南北に延びる羽曳野丘陵上には廿山古墳、真名井古墳をはじめとする前期の前方後円墳が位置する。これらの古墳の周辺に古墳時代後期の古墳がまとまってみられる。その中にあって、丘陵の東縁から南斜面にやや下った中腹に横口式石棺を持つお龜石古墳が位置する。また、同古墳の被葬者と深い関係があったと考えられる飛鳥時代寺院址である新堂廐寺が東南方約250mの位置に認められる。

注1 北野耕平「錦織縄文遺跡について」(『古代学研究』第5号、1951年)

注2 梅原末治・島田貞彦「河内国南高安及び喜志石器時代遺跡調査」(『京大考古学研究報告』第2冊、1917年)

注3 梅原末治「近時調査せる河内の古墳」(『考古学雑誌』第5卷第3号、1913年)

注4 藤原耕平・井上薰・北野耕平「河内における古墳の調査」(『大阪大学文学部国史研究室報告』第1冊、1964年)

注5 猪飼兼勝「飛鳥時代墓室の系譜」(『研究論集』・奈良国立文化財研究所学報』第28冊、1976年)

注6 石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」(1936年)

大阪大学国史研究室「河内新堂廐寺」(『第1期調査報告』、1960年)

III 層序及び遺構

1. 層序

調査区は、周辺の水田地よりも約80cmの段差をもった標高59m前後の畠地であった。調査区西辺は条里制の区画に一致するもので、この段をもった地形がかなり早い時期に形成されたと思われる。基本的な層序は地表面より盛土、耕土（第1層）、床土（第2層）、灰黄褐色土（第3層）、灰黄褐色混砂礫土（第4層）、黄褐色粘質土（第5層）とづいている。これらの各層のうち、盛土は西半部のみにみられる。また、調査区西部では耕土直下に地山面が現われる。地山面は西から東へ傾斜しており、地山までの深さは最も深い部分で約90cmである。灰黄褐色土（第3層）、灰黄褐色混砂礫土（第4層）、黄褐色粘質土（第5層）は調査区東半部に堆積するもので、なかでも第5層は調査区の北東部のみにみられる。第3層、第4層、第5層とも、弥生、須恵器、土師器、瓦器等を包含する層である。遺構等の検出面は灰褐色砂礫土及び黄褐色粘土の地山である。調査区の北部では南西から北東方向の自然流路を検出した。

2. 遺構

検出した遺構には溝8、土壤4の他、焼土塊、ピットがある。以下、各遺構について説明を加える。なお、調査区のほぼ中央に設けた試掘溝より西半をA地区、東半をB地区とした。

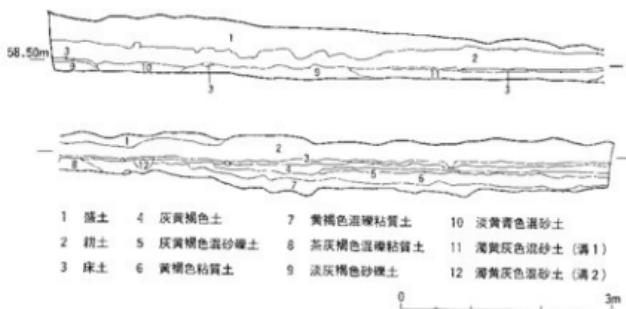
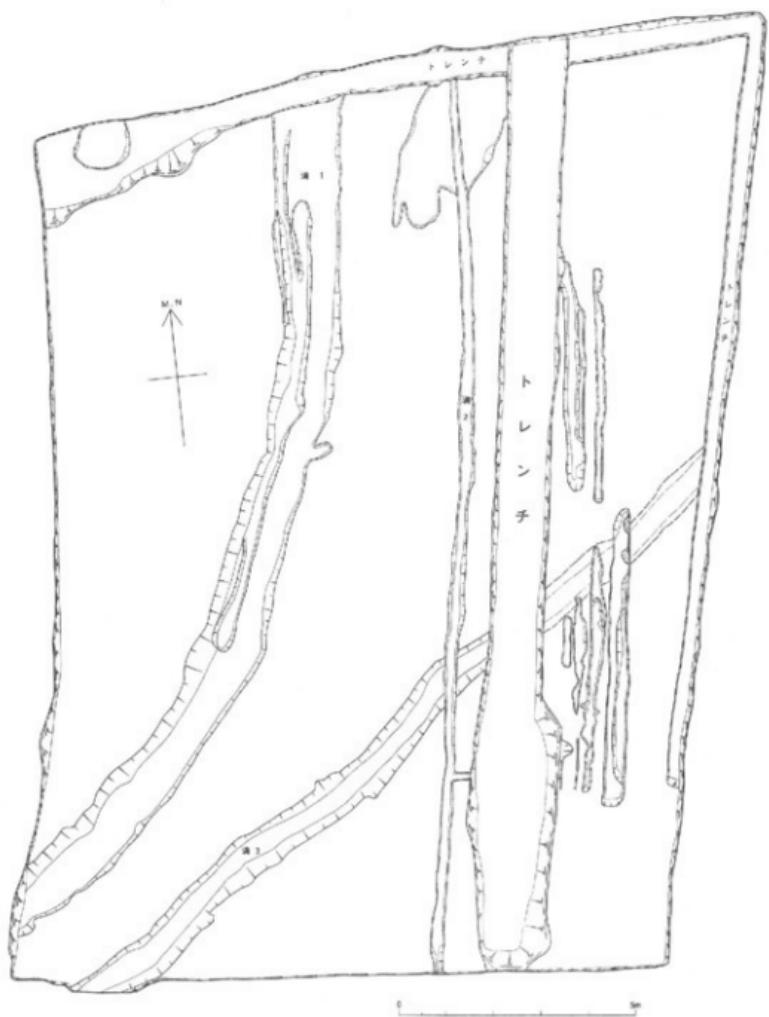
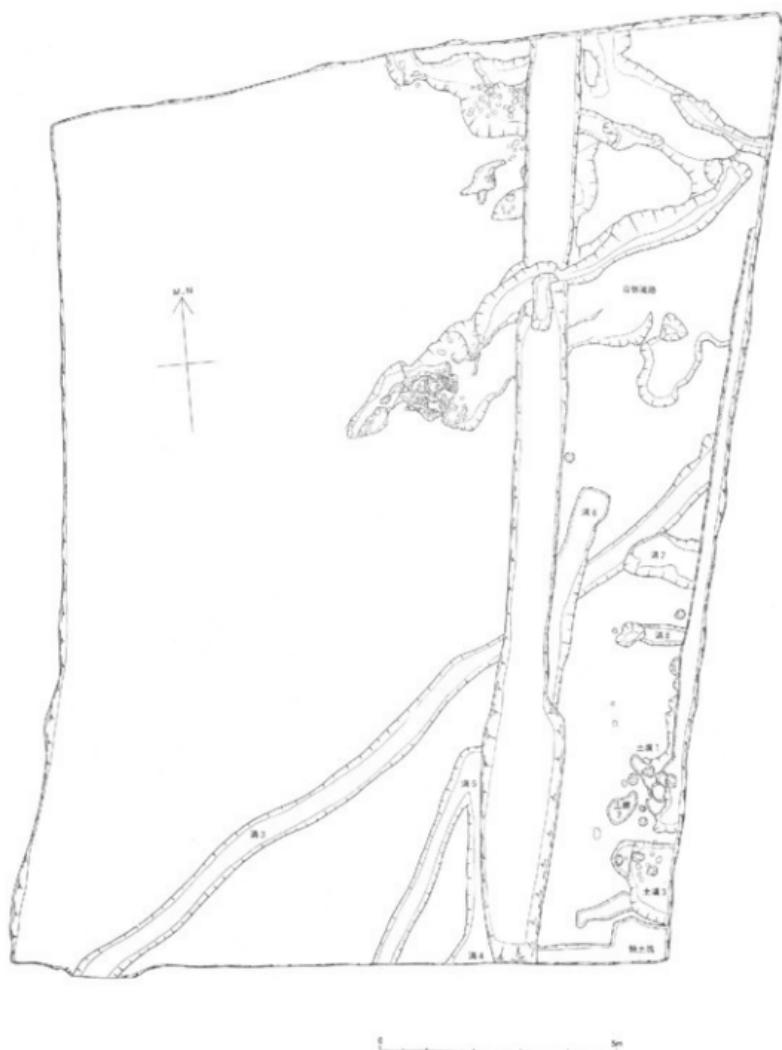


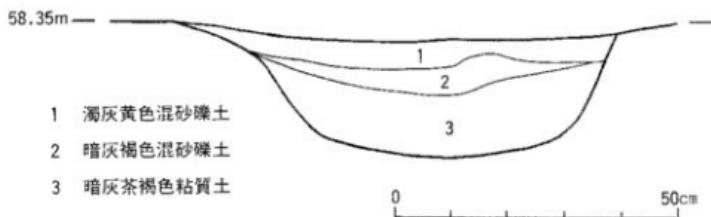
図3 北壁断面図



挿図4 造構平面図



挿図5 遺構平面図（地山面）



插図 6 溝3断面図

溝1 A地区に位置し、調査区北壁から大きな円弧を描くように南西方向にのびる溝である。溝幅は約120cm、深さは、上面が削平されているため、最も深い部分で約15cmと浅い。溝底部における高低差は、北と南ではほとんどみられない。埋土は濁黄灰色混砂土で、土師器、須恵器の他、サスカイト剝片が出土している。

溝2 A地区、調査区のはば中央を溝3を切って南北方向にのびる溝である。南部で東に支流がのびるようであるが、試掘溝により延長部は不明である。断面はU字形で、溝幅20~40cm、深さ13cmである。埋土は濁黄灰色混砂土で溝1と同様である。埋土中より土師器、須恵器の他、サスカイト剝片が出土している。

溝3 A・B地区を南西から北東方向にやや蛇行しながらのびる溝である。溝幅は65~80cmで、北東方向に少しではあるが狭くなっている。深さは15~25cmで、南西から北東方向に低くなっている。埋土は上か順に、濁灰黄色混砂礫土、暗灰褐色混砂礫土、暗灰茶褐色粘質土である。溝の北東部付近では暗灰褐色混砂礫土は認められない。遺物は、暗灰褐色混砂礫土中より最も多く出土しており、土師器、須恵器の他、サスカイト片がある。

溝4 A地区南に位置し、南壁から北方向にのびると思われる溝である。溝5によって切られているため長さ4mを確認しただけである。また、溝幅は試掘溝によって東肩が切れているため不明である。溝底部はほぼ平坦で、深さ約10cmである。埋土は暗灰黄褐色粘質土で、須恵器が出土している。

溝5 溝4のすぐ西側を南壁中央部から北北東方向にのびる溝である。溝4を切ってやや東にのびるようであるが、試掘溝によって切られているため、長さ5mを確認できただけである。溝幅は80cmで、深さは20cmである。埋土は暗灰茶色粘質土で、土師器、須恵器が出土している。

溝 6 B地区中央部よりほぼ南にのびる溝である。溝幅は北部で約70cmである。深さは5~13cmで、北と南ではわずかではあるが高低差をもって南にかけて低くなっている。長さは試掘溝によって切られているため約450cmしか確認できなかったが、南壁断面で観察する限りでは、つづいて南にのびるようである。埋土は茶灰褐色粘質土で、土師器、須恵器の他、サヌカイト剣片が出土している。

溝 7 B地区のほぼ中央部を溝3の肩を切って東につづく溝状遺構である。幅約100cm、深さは最も深い部分で約30cmである。西と東では約20cmの高低差がみられる。埋土は濁灰褐色粘質土である。

溝 8 溝7の南に位置し、東につづく溝状遺構である。幅約40cm、深さ12~17cmで、底部は東に低くなっている。西端部には径約50cmの落ち込みがみられる。埋土は濁灰褐色混砂粘質土である。

土壤 1 B地区の南に位置する。土壤の東部大半は壁にかかり、全体の形状はつかめないが、検出面でみる限り不定形である。土壤内には径20cm前後の落ち込みがみられる。東壁断面での深さは約30cmである。埋土は上下2層に分けられ、上層は濁黄灰褐色粘質土、下層は暗灰褐色粘質土である。下層からは多量の土器片が出土しており、石器もみられる。

土壤 2 B地区の南、土壤1の西に隣接している。長軸80cm、短軸30~50cm、深さ8cmである。土壤内には多量の炭が認められる。

土壤 3 B地区、土壤の南に位置する。土壤1と同じく遺構の一部は東壁にかかり、形状はつかめない。東壁部での南北長180cm、深さ約30cmである。土壤内には大小の落ち込みがみられる。また、土壤の南東部には幅20~30cm、長さ120cm、深さ4cmの浅い舌状の掘り込みが東にのびている。埋土は上下2層に分けられ、上層は濁黄灰褐色粘質土、下層は灰褐色混砂粘質土で、炭を多く含んでいる。また、東の舌状部の埋土は暗褐色粘質土である。下層からは多量の土師器と須恵器が出土しており、サヌカイト剣片もみられる。須恵器の中には完形の杯が出土している。

土壤 4 調査区の南東隅に位置する。土壤の大半が東壁にかかり、一部を検出したにすぎない。土壤内には3ヵ所の落ち込みがみられ、北側底部で須恵器杯蓋が完形で出土している。埋土は灰褐色粘質土で、一部に炭が含まれ、土師器、須恵器が出土している。

焼土塊 B地区的南端に位置し、一辺約2m四方の範囲で検出した。検出した焼土塊はブロック状を呈し、一部に明らかに人為的に造られた面をもったものがある。最も南で検出したものを観察すると、粘土を圧着した痕跡が認められる。削平によって散乱しているが、粘土の床面が熱を受けて焼土化した上に約10cm程度の焼土塊がよく、赤く焼きしまった面をもって識別できる。



挿図7 焼土塊平面図・断面図

焼土塊の認められる範囲のはば中央部で、一辺約70cmの方形に近い土壤を検出した。土壤内には径8~10cmのピット状の掘り込みがみられる。径20cmの大きめのピットは、土壤の埋没後に掘り込まれたものと思われる。土壤の埋土は暗灰褐色粘質土で、埋土中より焼土塊の小片が数個出土している。

検出した焼出塊は、出土状況から判断して、カマド状の遺構ではないかと考えられる。また隣接した土壤とは同一面で検出したが、その関連性は明らかではない。

IV 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物のうち、容器類には弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器などがある。石製品としては石鎚、石匙、砥石などがある。この他、サヌカイトの剣片も162点検出されている。土製品としては瓦がある。出土遺物のなかでは、表1でしめしたように、須恵器と土師器が最も多く、全体の85%を占めている。ここではまず、溝3から出土した土器を概観したのち、土壤出土のものをを中心にして、今回の調査で出土した須恵器と土師器とその他の主要な遺物について記述する。

出 土 遺 物	割 合 (%)
須 恵 器	63.1
土 師 器	21.9
瓦 器	4.0
陶 磁 器	3.5
瓦 質 土 器	0.5
弥 生 土 器	0.2
瓦	5.6
石 製 品	1.2

表1 出土遺物の割合

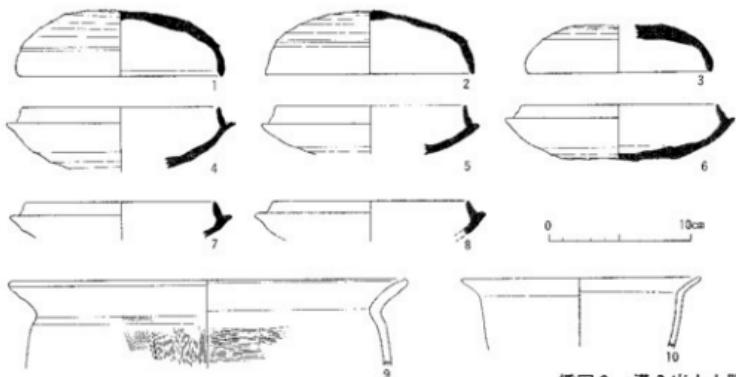
1. 溝3出土土器

溝3からは須恵器と土師器が出土した。須恵器には蓋杯、有蓋高杯用つまみと甕が、土師器には鍋、甕、高杯、鉢釜がある。須恵器の蓋杯はすべて、今回の調査で出土した須恵器の中では古い様相を呈す。そこで、溝3からの出土遺物を一括遺物として取扱う。

須恵器

蓋（1～3） a・bの2類に区分する。a類には口径14.6cm、器高4.7cmをはかる（1）と口径14.7cm、器高4.5cmをはかる（2）とがある。天井部と口縁部を分ける稜は、凹線をめぐらすことによってわずかに残っている。口縁端部は内傾して面をもつ（1）と丸くおさまる（2）がある。b類には口径12.9cm、残存器高3.4cmをはかる（3）がある。天井部と口縁部を分ける稜はまったく失なわれている。口縁端部は丸くおさまる。a類に比して扁平である。a・b類とも天井部外面は回転へら削り、他は回転なで調整が施されている。色調は（1）、（2）が灰色、（3）が灰青色を呈す。すべて硬質である。

杯（4～8） 口径13.5～14.0cm、受部径15.0～16.8cm、器高4.5cm、たちあがり高0.9～1.35



擲図 8 溝 3 出土土器

cmをはかる。たちあがりは内傾し、口縁端部は丸くおさまる。受部端部も丸くおさまる。底部は扁平である。底部外面は回転へら削り、他は回転なで調整が施されている。蓋 a 類と組むものである。(6)を除いて、他はすべて硬質で灰色を呈す。(6)は灰白色を呈す。

土師器

鍋 (9) 胸部から底部にかけて欠失するが、薄手のやや扁平な体部をもつものと思われる。口径28.0cmをはかる。外反する口縁部の外面は横方向になで、内面は横方向に刷毛目が施される。体部外面は斜方向に刷毛目が施される。胎土には金雲母が目立ち、明茶褐色を呈す。

甕 (10) 口径16.8cmをはかる。強く外反する口縁部に胸部の張らない鉢状の器体をもつ。胎土は精良で淡橙色を呈す。

2. 土 器

須恵器

蓋 (11~28, 53~58) c・d の2類に区分する。c類は口径10.0~12.4cm、器高3.2~4.0cmをはかる。天井部と口縁部を分ける回線も稜も認められない。頂部は平坦なもの、丸みをもつもの、尖り気味のものがある。天井部から口縁部にかけては、ゆるやかな丸みをもってくだるものとなだらかに内寄してくだるものとがある。口縁部はまっすぐにくだるもの、外方へ開くもの、内側へ入れ込むものがある。口縁端部は丸くおさまる。調整は(11)を除いて、天井部外面は回転へら切りのまま残され、他は回転なで調整が施されている。(11)は天井部外面に回転へら削りを、他は回転なで調整が施されている。すべて内面中央部には一定方向のなでが加えられている。すべて硬質である。d類は口径10.9~12.3cm、かえり径9.0~9.85cm、残存器

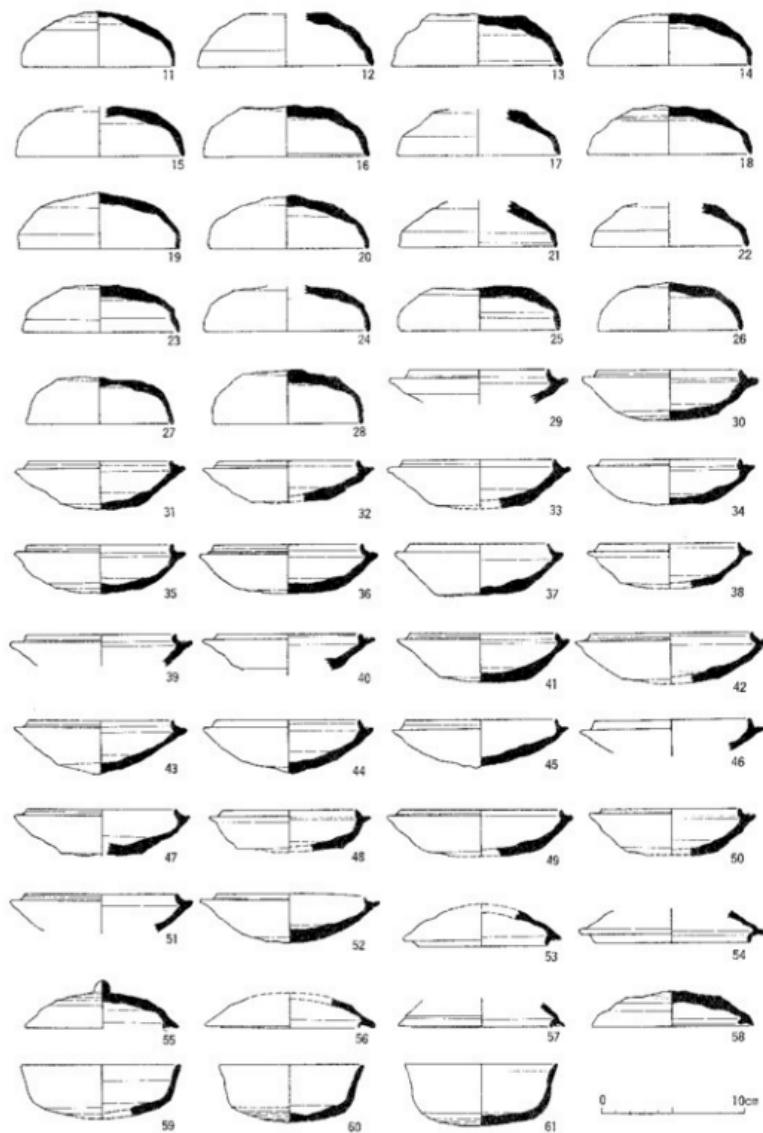
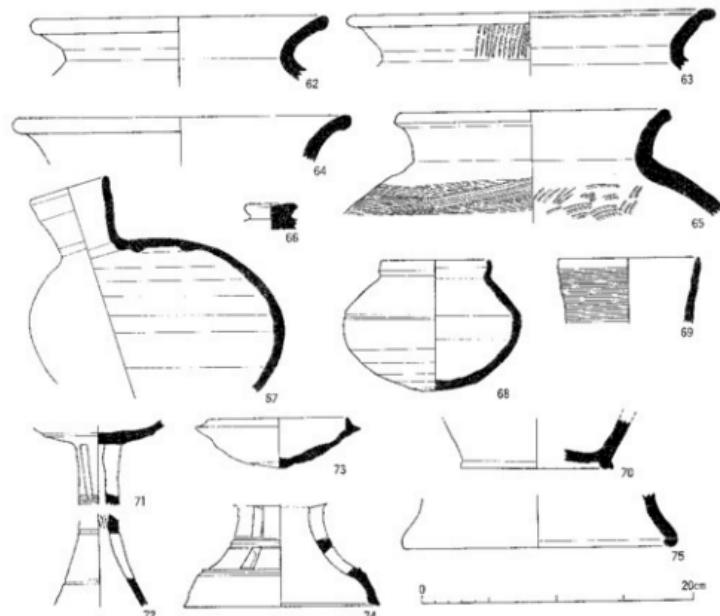


図9 須恵器

土壤1 (19・24~26・36~39・41・46・49)

土壤3 (1~18・21~23・27~33・40・42~45・47・50・53~61)

土壤4 (20・48・51・52) 第4層 (53)



土壤1 (67・73)
第3層 (70・72) 土壤3 (64・67・68・70・71・73・75)
第4層 (63・74) 第5層 (62・65・66・69・74) 挿図10 須恵器

高3.1cm、つまみ径1.1cm、つまみ高0.9cmをはかる。杯身をさかさまにした形態で、端部内面にかえりをもつ。かえりは口縁端部よりも下方へ突出しているものが大半を占めるが、口縁端部とならぶもの、わずかに入り込んでいるものも認められる。つまみは宝珠形のものと乳頭状のもの(31)が認められる。調整は天井部外面が回転へら削り、他は回転などで調整が施されている。内面中央部には一定方向のなでが加えられている。つまみは貼付法、かえりはオリコミ手法による。すべて硬質である。

杯 (29~52, 59~61) 蓋c・d類と組み合わさるものである。c類は口径9.5~11.5cm、受部径11.4~13.3cm、器高3.25~3.85cm、たちあがり高0.4~0.8cmをはかる。全体に浅く扁平で、たちあがりは短くなり、内傾している。口縁端部はなでによってつまみあげているものが多い。受部は水平、またはやや上向きに外上方へのびる。受部上面には1条の凹線の入るものもある。調整は(29)、(30)を除いて、底部外面は回転へら切りのまま残され、他は回転などで調整が施されている。(29)、(30)は底部外面に回転へら削りを、他は回転などで調整が施されている。すべて内面中央部には一定方向のなでが加えられている。たちあがりの大半はオリコミ手法による。(33)、(37)、(44)、(46)、(51)は軟質で灰白色を呈すが、他はすべて硬質で灰色お

より青灰色を呈す。d類は口径10.3~11.2cm、器高4.1~4.45cmをはかる。従来の蓋をさかさまにした形態で、口縁部はやや外方へ開く。口縁端部は丸くおさまる。調整は底部外面に回転へら削りを、他は回転なで調整が施される。内面中央部には一定方向のなでが加えられている。すべて硬質で灰青色を呈す。

甕 (62~65) くの字に外反する口縁部をもつ。口縁端部は外方へ丸く肥厚するものとわずかに稜をもちらがら丸くおさまるものとがある。(63)は口縁端部内面に1条の沈線が認められる。調整は(62)、(64)が内外面とも回転なで調整。(63)は頭部に平行押きを、他は回転なで調整が施されている。(65)は口頭部内外とも回転なで調整、体部外面はカキ目を、内面は同心円の型文が認められる。

つまみ (66) つまみ径3.8cm、つまみ高1.2cmをはかる。有蓋高杯用のつまみと思われる。

平瓶 (67) 口径5.8cm、残存器高15.4cmをはかる。扁球形の器体に筒状の口頭部をとりつける。体部の大きさに比して口頭は細い。口縁端部は丸くおさまる。調整は回転なで調整。硬質で灰色を呈す。

短頸壺 (68) 口径8.0cm、器高9.8cmをはかる。わずかに外寄気味に直立する口縁部に扁球形の器体をもつ。口縁端部は丸くおさまる。底部と胴部の境界に凹線を1条めぐらしているが、部分的に2条みる。調整は底部外面をへら削りし、他は回転なで調整が施されている。硬質で灰青色を呈す。

直口壺 (69) 筒状の口頭部のみ残存。口縁端部は丸くおさまる。外面はカキ目調整、内面は回転なで調整が施されている。

高台付底部 (70) 外方へふんばった高台をもつ底部片である。

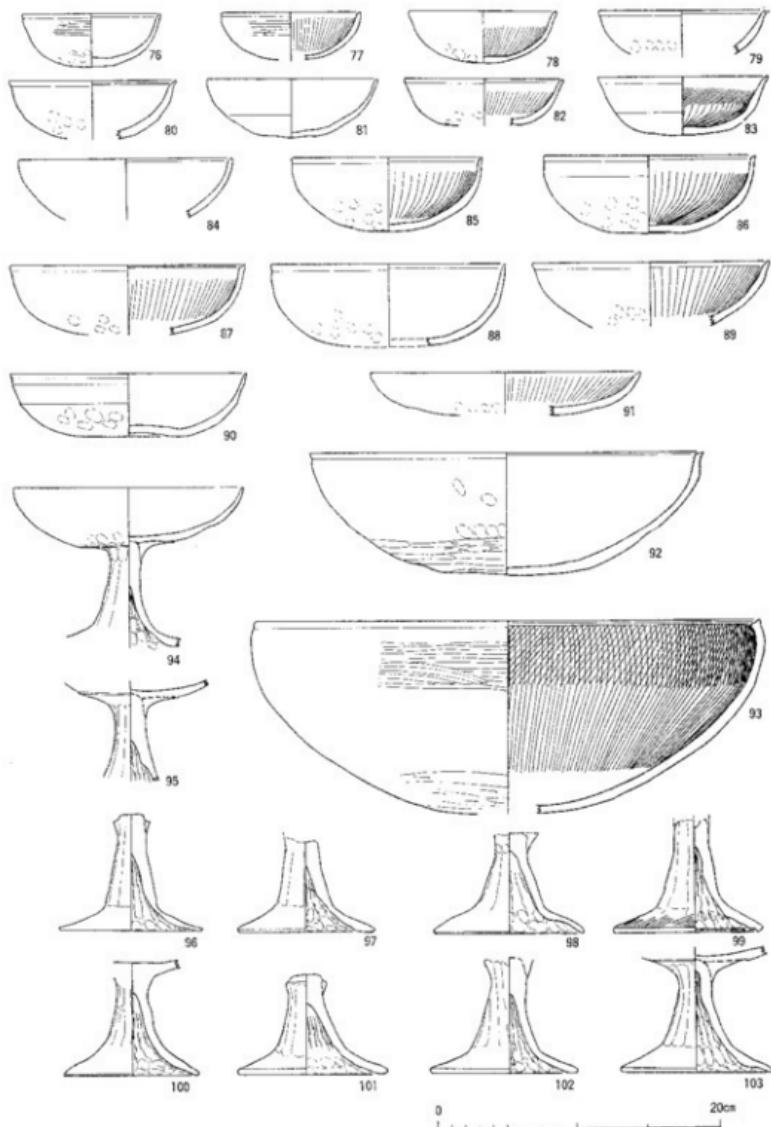
高杯 (71~73) 無蓋高杯(71)、(72)と有蓋高杯(73)とがある。無蓋高杯の杯部は口縁部と底部とが稜によって分けられるものである。脚部は細長くしづら、外方へ大きく開く長脚2段透しで、3方向に透しが認められる。有蓋高杯は杯部のみ残存であるが、杯c類と同じ形態のものである。

台付長頸壺 (74) 台脚部のみ残存。高い脚部が裾部近くで内屈してふんばる形態のものである。脚柱部と裾部の境界には鋭い凸線が1条めぐらされている。脚柱部には長方形の透しが2条の沈線をはさんで上下に3方向づ認められる。

台付鉢 (75) 台脚部のみ残存。内屈する裾端部は内側へ丸く肥厚する。

土師器

杯 (76~90) 口口径9.8~11.9cm、器高3.8~4.75cmをはかる小型のものと、口径13.5~16.8cm、器高4.6~5.5cmをはかる大型のものとがある。それらには丸底のものと丸底と平底の中間形態のものがある。底部から口縁部にかけては、ゆるやかなカーブをえがくものとわずかに屈



土壤1 (76・80・83・88・90・94・92・98・103) 土壤4 (92)
土壤3 (77～79・81・82・84～87・89・91・93・95～97・99～102)

折して口縁部に至るものとがある。口縁部はほぼ直立するもの、やや外反するもの、外方へ開くものなどがある。口縁端部は丸くおさまるもの、内傾して平坦な面をもつもの、内傾して凹面をもつものなどがある。口縁部外面はへら磨きを施すものと横にならせるものとがある。底部外面に指おさえ痕が残るものが多い。内面は暗文のみられるものとみられないものがある。暗文はすべて正放射状で杯内面の中心点からのびるものと、中心から少し離れてのびるものがある。(83)は下段が正方向、上段が斜方向になる2段放射状暗文で、上段は密に施され、へら磨きに近い状況を呈している。

皿 (91) 口径18.1cmをはかる。口縁端部は内傾して平坦な面をもつ。底部外面に指おさえ痕が残る。内面には正放射状暗文が認められる。

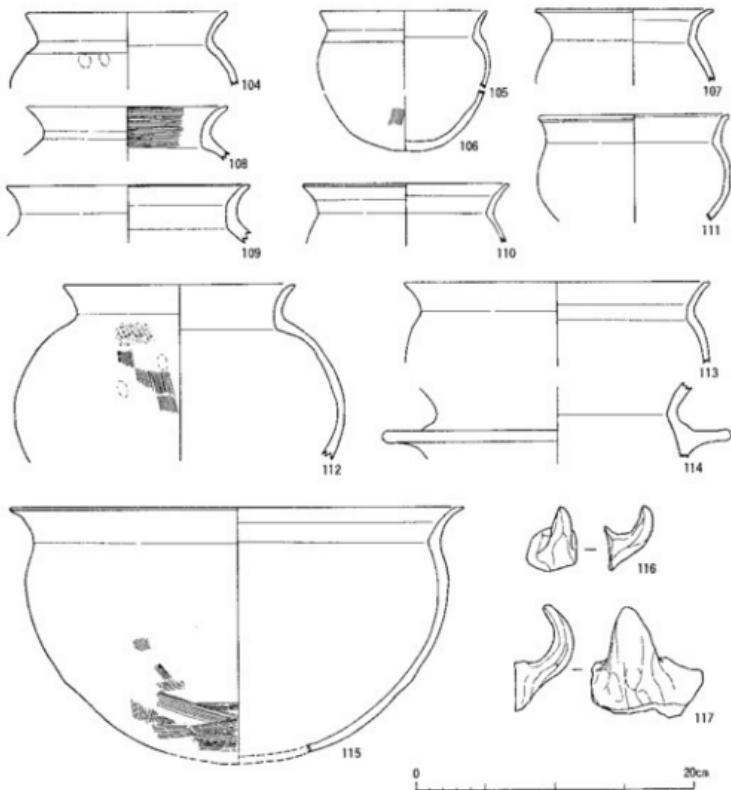
鉢 (92・93) 口径28.0cm、器高31.1cmをはかる(92)と口径35.6cm、残存器高13.8cmをはかる(93)とがある。ともに丸底からゆるやかなカーブをえがいて口縁部に至るものであるが、(93)は口縁部が内弯している。面者ともに口縁端部は内傾して平坦な面をもつ。調整は(92)が底部外面にへら削りを、(93)は口縁部外面にへら磨き、底部外面にへら削りが施されている。内面は(92)は剝離のため不明であるが、(93)には下段が正方向の、上段が格子目状になる2段放射状暗文が認められる。

高杯 (94~104) 杯部残存のものはすべて杯底部外面に接合時の段をもつ。口縁端部は丸くおさまる。脚部は細長い脚柱部に外方へ大きく開く裾部をもつ。脚柱部外面は縦方向になでつけたために面が認められる。内面はしづり目が残る。裾部の仕上げは粗雑で、内面には指おさえ痕が2段以上並んで残り、凹凸が目立つ。(99)は裾部外面に刷毛目が施されている。杯部と脚部の接合は挿入法による。

甕 (105~113) 口径11.9~16.5cmをはかる小型のものと口径21.9cmをはかる大型のものとがある。小型の甕は外反して丸くおさまる口縁端部をもつもの、外弯して先細りの口縁端部をもつもの、外反したのち口縁端部上面で平坦な面をもち、外端が丸くおさまるものとがある。調整は大半が剝離のため不明であるが、(70)は口縁部内面に刷毛目が、(133)は体部外面に刷毛目が施されている。なお、(133)は体部外面に煤が付着している。大型の甕はゆるやかに外反する口縁部をもち、口縁部上面は平坦な面をもつ。

鈔釜 (114) 大きく外反する口頭部に水平にのびる鈔をもつ。鈔部径25.0cm、鈔幅3.5cmをはかる。鈔はなでによって貼付ける。胎土には金色の雲母を多量に含み、暗茶褐色を呈す。生駒西麓産である。

鍋 (115) 口径31.9cm、残存器高17.6cmをはかる。ゆるやかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は甕(69)とほぼ共通する。底部は丸い。把手の有無は不明である。底部外面は刷毛目が施されている。



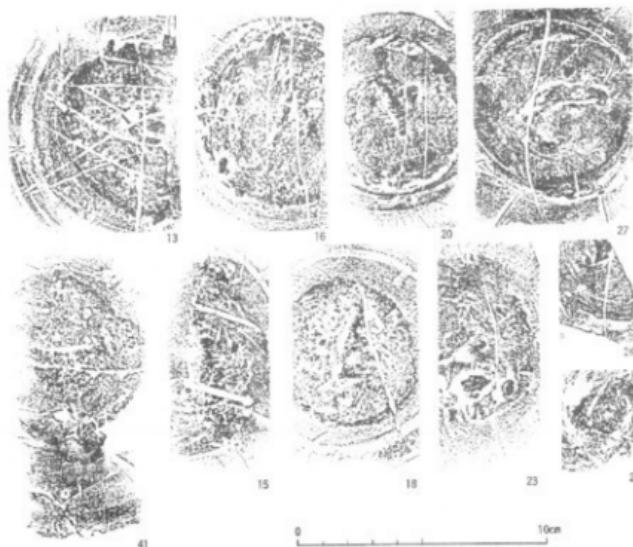
土壌1 (106・109・112・113) 土壌3 (104~108・110・111・114・115)
焼土塊直上 (117) 第5層 (116)

挿図12 土師器

把手 (116・117) (116)は残存長3.4cmをはかる、断面円形の把手である。色調は灰白色を呈す軟質のものである。(117)は残存長4.2cmをはかる三角形角状把手である。色調は明褐色を呈す。

3. ヘラ記号について

今回出土した須恵器に何種類かのヘラ記号が認められた。器種としては蓋杯だけで、他器種には認められなかった。挿図13にしるしたものは、土壌1(26・41)、土壌3(13・15・16・18・
(注1)23・27)、土壌4(20)、溝3(2)から出土したものである。器種は41が杯で、他はすべて蓋であ

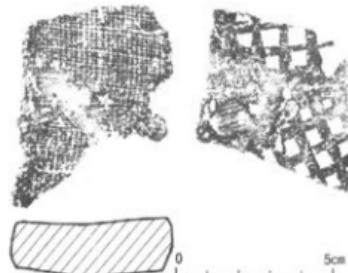


挿図13 ヘラ記号

る。杯は底部外面に、蓋は(2)を除いて、天井部外面に認められた。(2)は天井部内面に認められる。

注1 挿図13に付された土器番号は、挿図8と9に付された番号と共に通する。

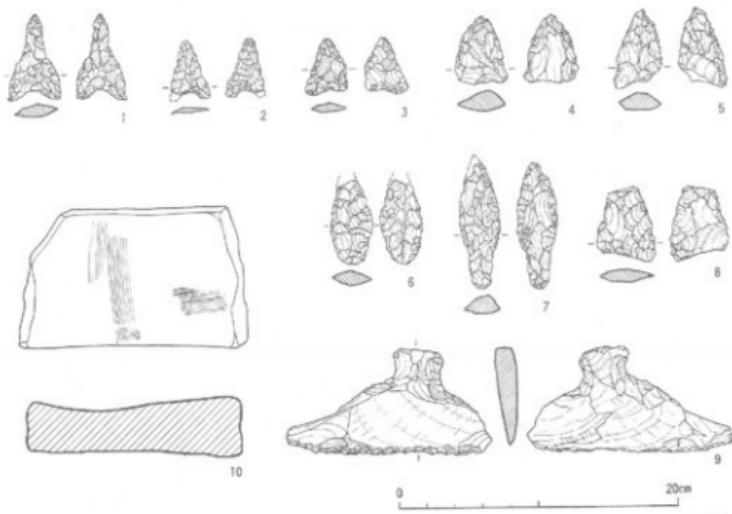
4. 瓦



挿図14 瓦

瓦は47点出土している。縄目と布目が認められるものが多いが、1点だけ格子叩きと布目の認められるものがある。平瓦片で、白灰色を呈す硬質のものである。これは本遺跡より西方約350mにある新堂廃寺(注1)の瓦と思われる。

注1 北野耕平氏の御教示による。



挿図15 石器

5. 石 器

石器は石鏃8点、石匙1点、砥石1点が出土している。

石鏃 (1~8)　すべてサスカイト製で、基部の形状からみると凹基式(1~3)、平基式(4)、凸基式(7)の3型式が認められる。それぞれの法量は次のとおりである。(1)長さ3.1cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm、重量1.4g、(2)長さ2.1cm、幅1.4cm、厚さ0.25cm、重量0.6g、(3)長さ2.0cm、幅1.5cm、厚さ0.35cm、重量0.9g、(4)長さ2.4cm、幅2.0cm、厚さ0.7cm、重量2.8g、(5)残存長2.8cm、残存幅1.7cm、厚さ0.65cm、重量2.9g、(6)残存長3.05cm、幅1.5cm、厚さ0.55cm、重量2.5g、(7)残存長4.55cm、幅1.45cm、厚さ0.7cm、重量3.6g、(8)残存長2.7cm、幅2.1cm、厚さ0.55cm、重量2.7g。これらは土壠1(1)、焼土塊(2)、溝1(3)、(8)、溝2(7)、第3層(4)、(5)、(6)から出土している。石鏃はすべて側刃から剥離調整を施して製作しているが、とりわけ、(1)は丁寧で、基部側辺は鋸歯状を呈す。

石匙 (9)　サスカイト製で、つまみが刃部と平行して存在するものである。長さ3.75cm、幅7.4cm、厚さ0.8cm、重量13.0gをはかる。背面は一部、大きく欠損している。直刀の刃部は片面のみ剥離調整を行い、他面は傾斜を利用して両刃を作っている。つまみ先端部には自然面が残る。第3層から出土している。

砾石 (10) 長さ8.35cm、幅5.0cm、厚さ1.95cm、重量129.0gをはかる。平面、断面ともほぼ長方形を呈す。両面とも使用によって部分的に凹面を呈す。第5層から出土している。

6. 小 結

ここでは、最も多く出土した須恵器と土師器について、出土状況およびその年代等について補足する。

須恵器の蓋杯はすでに記述したa～d類の他に、蓋d類のかえりを消失寸前というべき程度にまで口縁内へ入れ込んだものがある。今、これをe類として記述する。a、b類は溝2、溝3、溝6および第5層から出土している。c類は今回の調査の中で最も多く出土した型式であるが、d類とともに溝3を除いてほぼ全域から出土している。その中でも土壙1、土壙3、土壙4から集中して出土している。e類は上述の造構内からは全く検出されず、それらを覆う第5層より上層の各層でのみ出土している。ただし、その量はきわめて少ない。そこで、これら^(注1)a～d類までの型式を各造構の時期にあてはめてみると、溝3ではb類が最も新しく、溝6および土壙1・3・4ではd類が最も新しい型式となる。なお、土壙1・3・4の出土土器の間には型式の組み合わせに差異がない。以上のことから、溝3、溝6、土壙1・3・4は、a～d類までの型式変遷のみられる時期に存在した造構であったと言える。ただし、これらa～dの推移^(注2)については層位的に確認できなかった。次に、これらa～d類をこれまでの他地域での出土例から考えあわせて実年代を与えてみると、6C末～7C中頃にかけての時期に比定することができると思う。

さて、次に土師器についてであるが、これらは土壙1～4出土のものを除いて、大半が小破片だったので、土壙出土のものについてのみ記述する。杯は径高指数36前後の比較的深いものが多い。平底の出現はまだみず、すべて丸底および丸底と平底の中間形態である。口縁端部は内傾して面をもつものだけで、肥厚するものはみられない。暗文はほとんどが正放射状暗文で、わずかに1例だけ、正方向と斜方向の2段放射状暗文が認められる。以上、土師器を概観してきたが、今回はこの資料が須恵器の蓋杯c・d類に伴うものであることだけを記述しておく。

注1 溝3からは他のものが若干混入されているが、その出土状況から考えてここでは省いた。

注2 中尾芳治『難波宮造造前の遺跡調査報告』(1965年)

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』(1976年)

V ま　と　め

今回の調査地は、中野遺跡の西半部、とりわけ国道170号線より西地域において調査機会を得た唯一の地点であった。これまで同地域は、富田林市教育委員会が1971年から1976年にかけて実施した分布調査の結果、弥生土器・石鎌・石槍・瓦等を採集し、弥生時代以降歴史時代に至る集落址であろうと考えられていた。今回の調査は、これまで遺物を採集しただけにとどまり、遺跡の内容もほとんど不明であった同地域の実体を把握する上で貴重な手がかりをわれわれに提供してくれるのではないかという大きな期待があった。

調査の結果、6世紀末から7世紀中頃にわたる遺物をともなった遺構を検出した。検出した遺構には溝状遺構・土壙・焼土塊等がある。発掘区の関係から部分的にしか検出できなかったけれども、この時期にあたる遺構の存在を明らかにし得たのは大きな成果であった。なかでも焼土塊は、後世の削平の影響を受けて散乱した状態で検出されたものの、焼土塊付近の床土面が熱を受けて焼土化していること、焼土塊の大部分は焼きしまった赤っぽい乳白色をしており明らかに床土面と区別できること、一部に人為的に造られたと思われる面をもっていること、また、その面に還元状態で熱をうけた痕跡がみされることなどから判断するならば、このブロック状を呈した焼土塊は、何らかの施設の一部、つまりカマド状遺構の基底部および壁体の一部ではないかと考えられる。

今回出土した遺物は、大半が土器類である。その中でも、7世紀代の土師器・須恵器の占める割合が大きい。土器類の他に石器・瓦等が出土している。これらの遺物のうち、7世紀代のものは、調査区全域からみられるけれども、7世紀代のものは土壙に限定される。また、第5層より出土した瓦は、調査地の西方約350mに位置する新堂廃寺の瓦と思われ、奈良時代のものである。

中野遺跡は、古く1892年に南河内郡新堂村大字中野から石鎌が採集されたことが学界に報じられて以来、1970年の本市教育委員会の調査等によって遺跡の内容が序々にではあるが明らかになってきた。今回検出した遺構には、6世紀末から7世紀中頃にわたる遺物が認められた。大量の土器を出土した土壙も、大半が部分的にしか明らかにされておらず、その規模や性格についても不明な点が多く、決して満足なものではなかったといえる。しかし、調査結果から過去の調査によって中野遺跡が喜志遺跡とならぶ弥生時代中期の集落遺跡として位置づけられてきた点を考えあわせてみると、弥生時代の遺構が検出されなかることは、従来の中野遺跡の性格とは異なるものである。むしろ、調査地西方に位置する新堂廃寺創建の時期を前後する遺構が認められたことで、新堂廃寺周辺の集落の存在の可能性を推測せるものである。

今回の調査は、少なくとも6世紀末から7世紀中頃にわたる遺構の存在を実証した点で、調査地一帯の遺跡の実体を知るうえで貴重な資料となるものである。

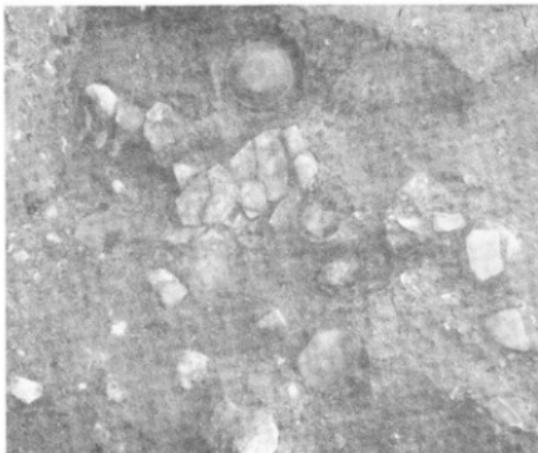
注1 富田林市教育委員会『富田林市の埋蔵文化財—埋蔵文化財基本分布図一』(1978年)

注2 大阪大学国史研究室『河内新堂磨寺』(「第1期調査報告」、1960年)

大阪府教育委員会『河内新堂・鳥舍寺跡の調査』(1961年)

注3 山崎直方『河内に於ける石器の新発見地』(『人類学雑誌』第7巻第72号、1892年)

注4 1970年に富田林市農業協同組合中野支所前の東高野街道から東方約40mの地点で小規模な試掘調査を実施した。調査の結果、北西から南東方向にのびる幅1.3m~1.6m、深さ70cmのV字形断面をもつ溝を検出した。溝内より第Ⅲ様式に属する弥生中期の土器片と石器類が出土した。なお、この試掘調査時の出土遺物については、(北野耕平『富田林市史』第4巻史料編1、1972年)を参照されたい。また、1978年には大谷女子大学の中村浩氏によって1970年の調査の際に検出した溝状遺構の延長部を確認された。つづいて1979年には東高野街道西側において、宅地開発に先立ち調査を実施した。この調査結果については、(中村浩編著『中野追跡発掘調査報告書』富田林市教育委員会、1979年)を参照されたい。



土壤3 内遺物出土状況

図 版

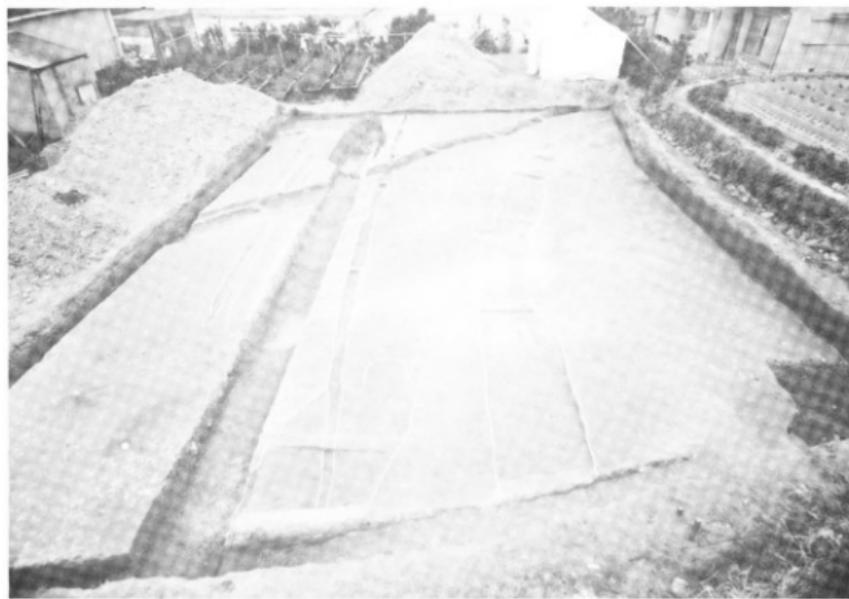


中野遺跡付近の航空写真（富田林市史編集室の写真）北東より

図版 2



発掘調査区の遠景 北東より



溝1・2・3 北より



溝3 南西より

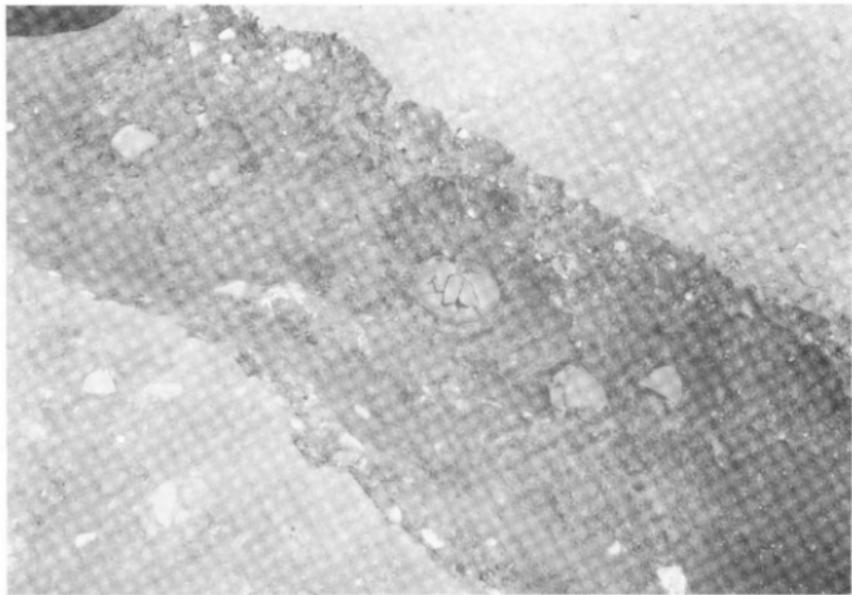


溝1・2・3 南より

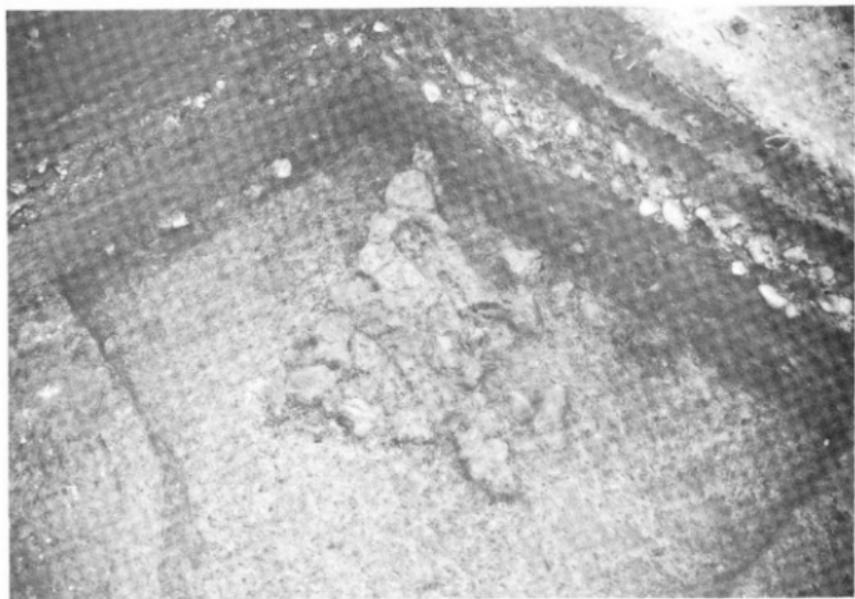
図版 4



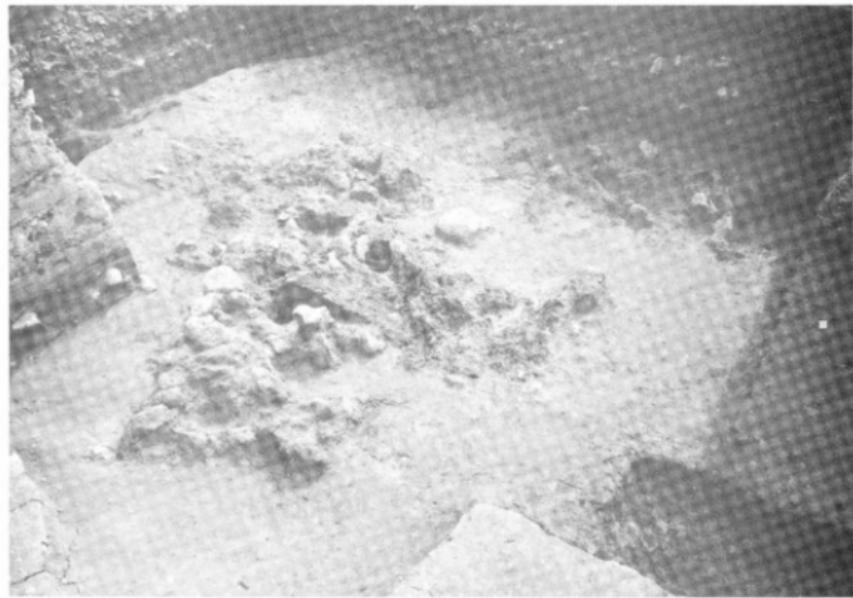
溝3遺物出土状況 北より



溝3遺物出土状況 西より

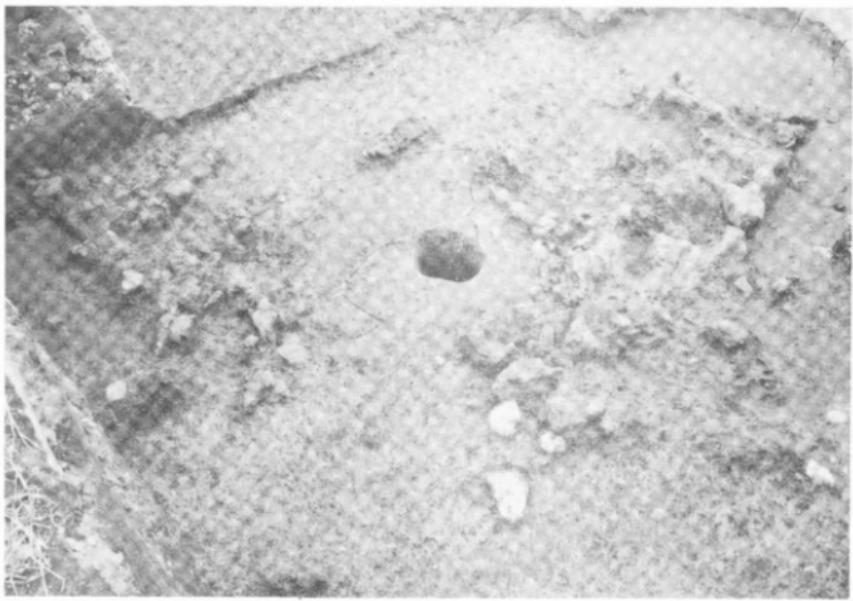


焼土塊出土状況 北西より



焼土塊出土状況（全景） 北西より

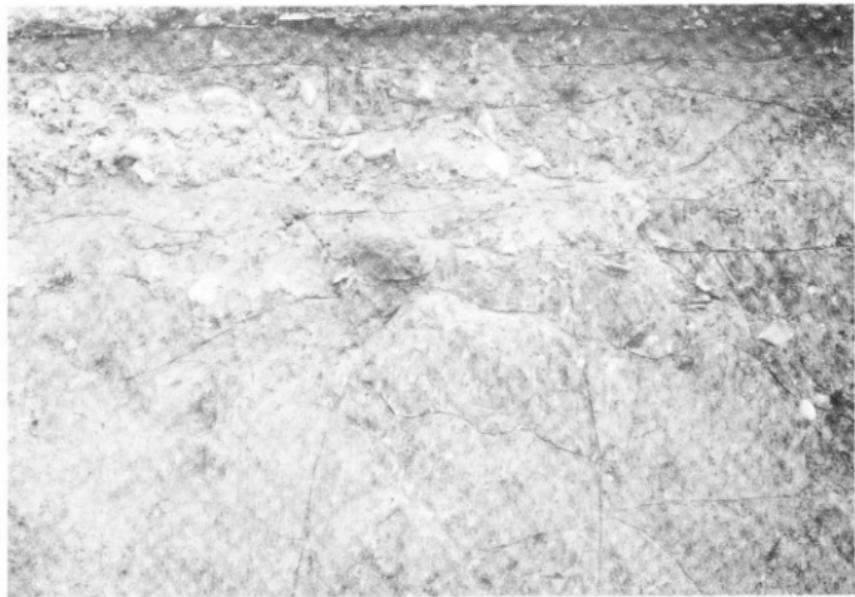
図版 6



焼土塊付近全景 南東より



焼土塊付近全景 北西より



調査区南壁断面 北より



調査区南東部全景 北より

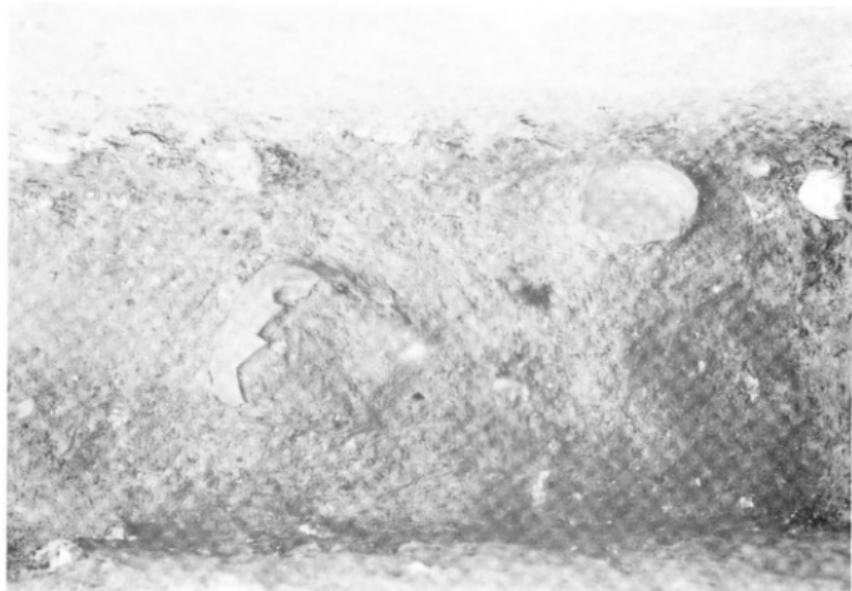
図版 8



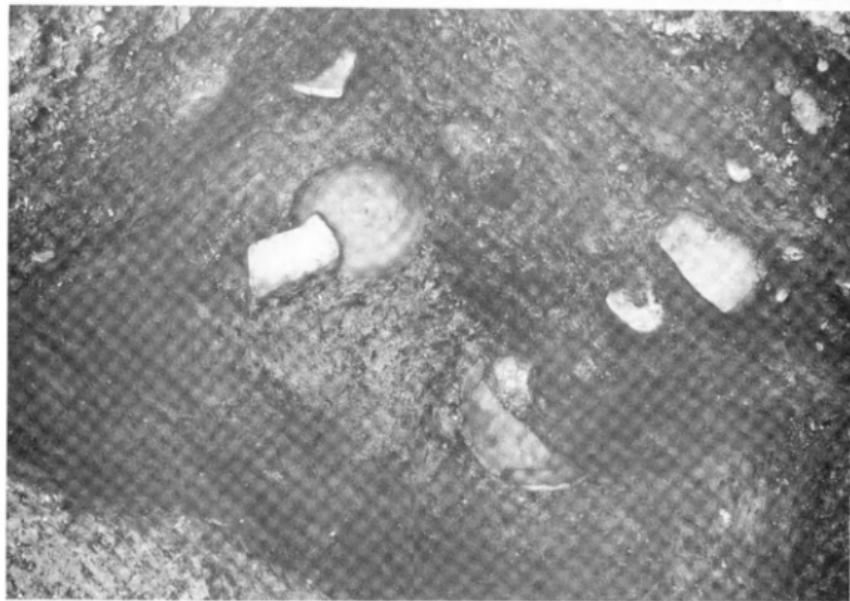
土壤 1 遺物出土状況 北西より



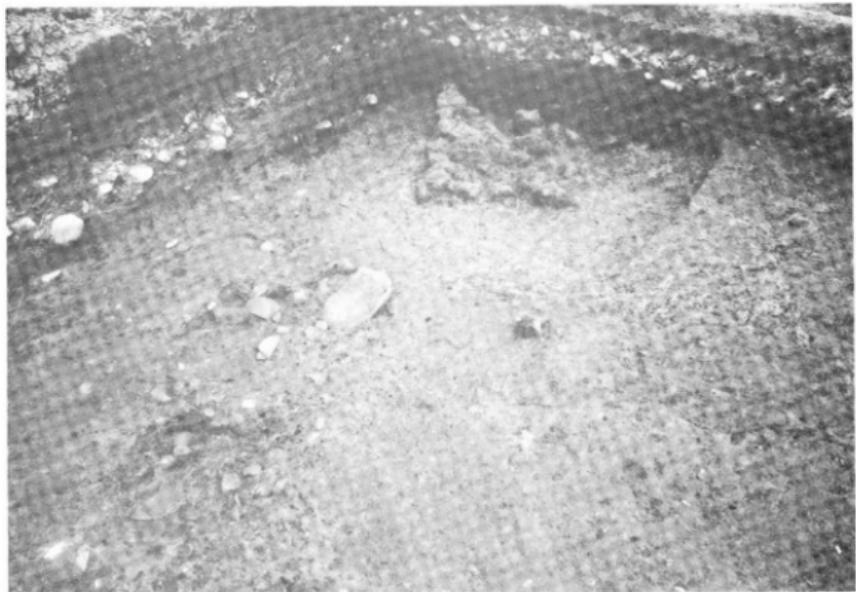
土壤 1 遺物出土状況 西より



土壤 1 遺物出土状況 西より



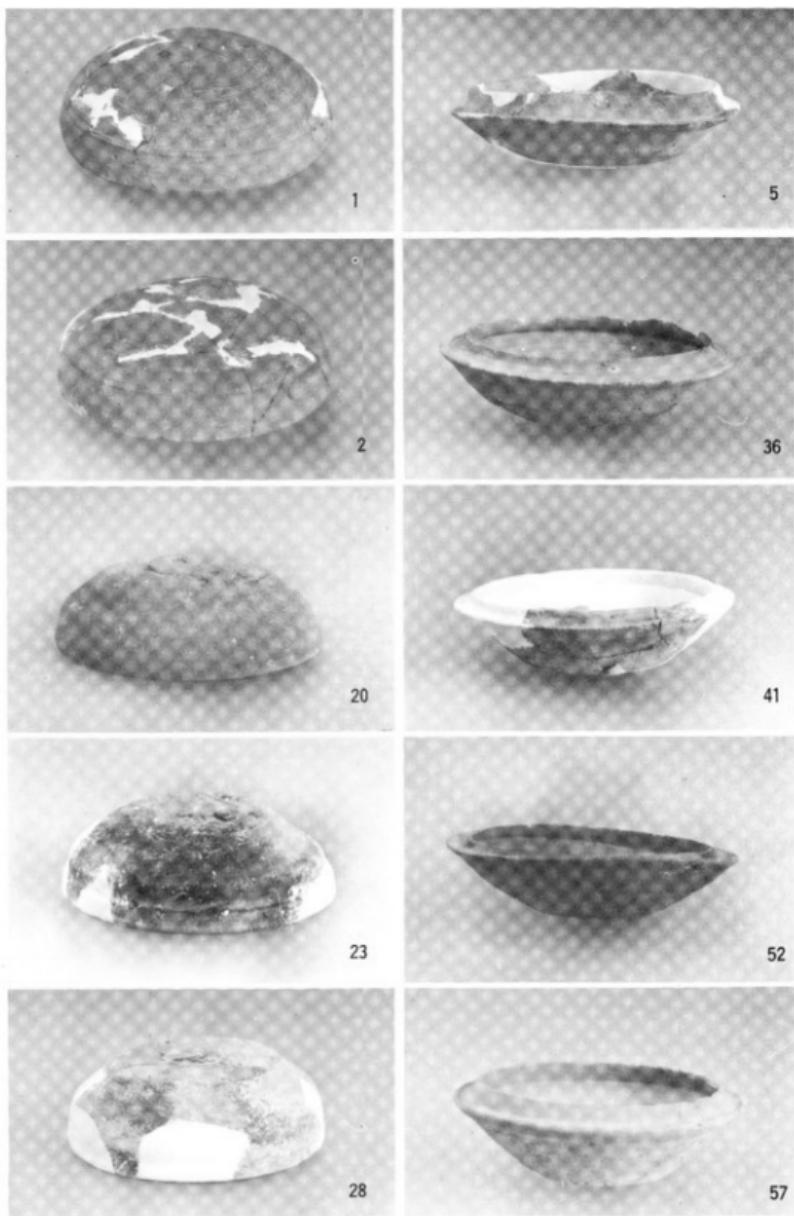
土壤 4 遺物出土状況 南西より



土壤 3 遺物出土状況（上方） 北西より



土壤 3 遺物出土状況（下方） 北より



須恵器 杯、杯蓋

圖版12



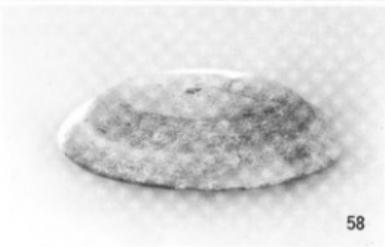
30



55



31



58

67



67

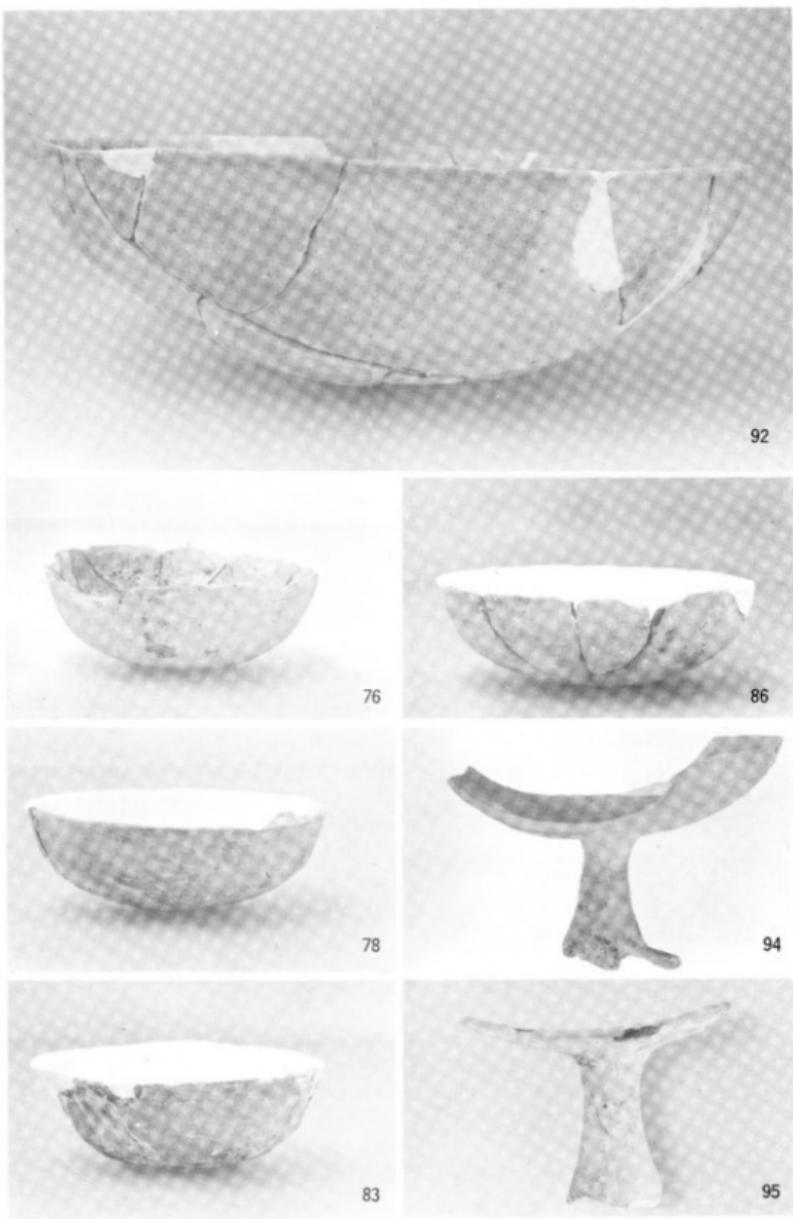


71



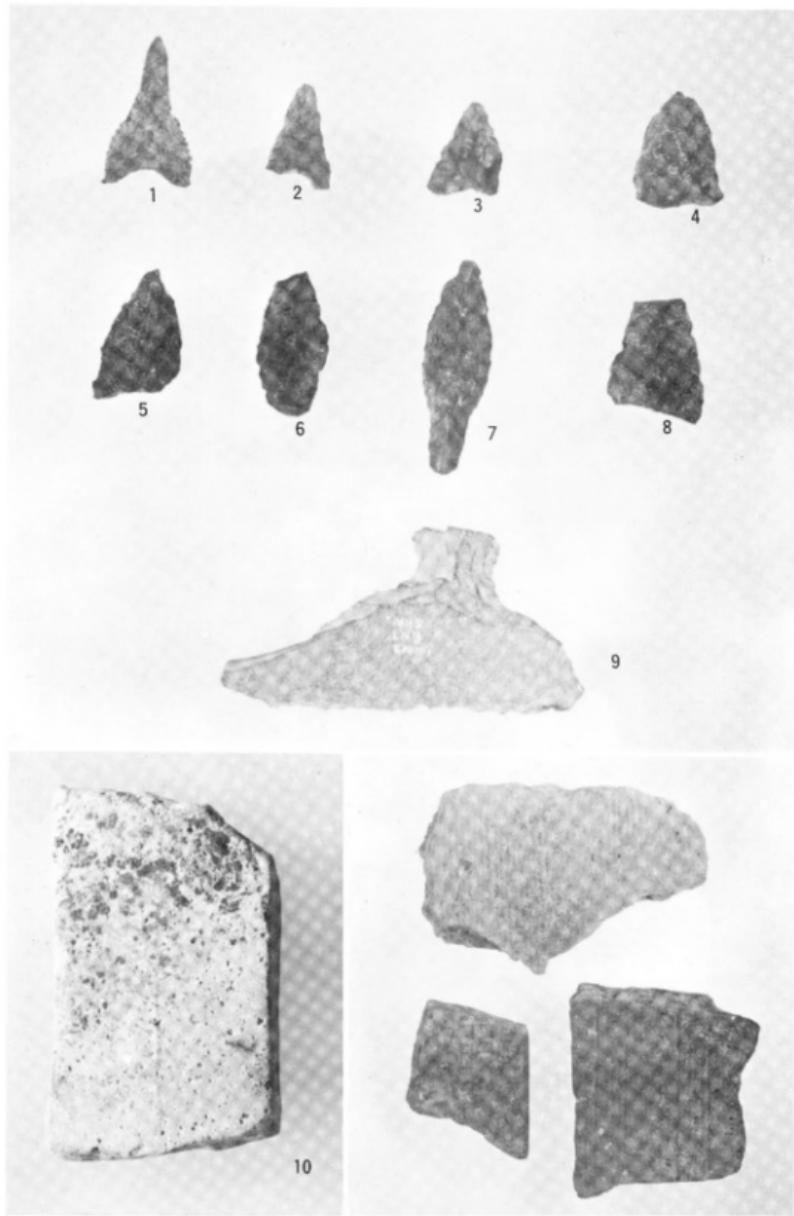
68

須惠器 杯、杯蓋、高杯、平瓶、短頸壺



土器
鉢、杯、高杯

図版14



石器（石鏨・石匙）・砥石・瓦

富田林市埋蔵文化財調査報告4

発行年月日 1981年3月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 石橋印刷所

